抹茶

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
抹茶

【Ｎコード】
Ｎ４０１６Ｓ

【作者名】
鹿の子

【あらすじ】
自称マッサージ師のホウさんと現役女子高生の私たち二人が働くのは、甘い甘いクレープ屋さんだった。
働くこと、人と人が関わることについて書きました。
自サイトでも公開中。

前編（前書き）

「選択可能な１００のお題」を使い書きました。

前編

自称マッサージ師のホウさん（注：ホウ酸ではない）と私は、今日も朝一（あさいち）のシフトで一緒にお店に入っていた。

最初の頃、「マッサージ師なんて夜の仕事っぽいのに、こんな朝早くからも働いているなんて変なの」と私が言うと、「君こそ、高校生だっていうのにこんな時間から働いているなんて変だ」と言い返された。

こちとら色々と理由があるのよね、と心の中で反論しながらも、そこんとこはこのホウさんには言いたくないので、私もホウさんについての個人的情報（噂によると、ホウさんは二十四時間休み無く、どこかしらで働いているらしいってことだけれど）の追究は止めにしている。

だから、私たちは毎日顔を合わせながらも、お互いのことは何も知らない状態だったのだ。

自称マッサージ師と現役高校生が二人して働いているのは、クレープ屋。

つまり、甘い小麦粉系の食物を出すお店だ。

親会社は小麦粉を取り扱っているところで、試験的にここと渋谷にそういったお店を出すことにしたのだそうだ。

新しい店だったので、店に住み着いているかのような主（ぬし）的アルバイターもいなく、職場としては快適だった。

自称マッサージ師も、「自称」がつくにしろマッサージ師なだけに手先は器用で、薄いクレープをまあるい鉄板の上で焼いてはどんどんとオーダーをこなしていった。

「ホウって、どんな字を書くんだろう？」
ランチタイムになると、ＯＬさんたちのそんな熱い視線をホウさんは浴び出す。
制服についているネームプレイトには、カタカナで「ホウ」としかない。
「アジア系？」
こっちにもしっかり聞こえるくらいの無敵の音量で、ＯＬさんたちはそんな会話を繰り広げていた。
私はオーダーをとりながら、話題の主のホウさんをちらりと見た。

ホウさんは涼しい顔をしながら（実際は鉄板は熱いのだが）、次々とクレープを焼くと、その中にあらびきウインナーやサニーレタスを巻いて逆三角のクレープを入れる紙にストンを入れ込むとカウンターにあるスタンドに立てた。
そして今度はチョコバナナクレープを作るために、またまた薄い生地を焼きだした。

一体一日に何枚の生地を焼くのか。

ホウさんは、ひたすら生地を焼く。
焼いて焼いて焼きまくる。
私はといえば、ただひたすらにオーダーをとる。
注文があるかぎり、とりまくる。

私たちは、そうしてお金を稼いでいる。
繰り返し繰り返し、同じことをこなしながら。
仕事って、そういうことなんだなぁって思った。
ただひたすらに、目の前のことに忠実に動く。

「向かいの店の新作のドリンクだって」

仕事を一緒に上がりになったホウさんが、制服のボタンを外しながら「ほれ」ってプラスチックのカップを差し出してきた。

向かいにはチェーンのカフェがあって、これはそこで売り出した冷たい抹茶のドリンクだ。

次のシフトで入っている大学生の美佳ちゃんから貰ったそうだ。

「あ、いや。しかし」

差し出されたカップをじっと眺めながら、これは美佳ちゃんからホウさんへのものだろうし、おまけにストローだし、でも断るのもなんだし、などと色々と考えて動きが止まってしまった。

「何を遠慮してんの。ほれほれ」

そこまで言われたら飲まないわけにはいかないし、あぁでもこれは私が欲しいって言ったわけじゃなくて、ホウさんが飲めって言ったわけで……などと頭の中に言い訳を百個くらい思い浮かべながら一口飲んだ。

「あ、甘くない」

抹茶系のドリンクって甘いことが多いけれど、これはそうじゃない。

すっきりしている。

おいしい。

疲れが取れる……。

「ほんじゃ、全部どうぞ」

ホウさんはそう言うと、首をかくかくと回しながら「お疲れさん〜」と言って更衣室へと入っていった。

それからもホウさんは、私と一緒に仕事が上がりになる時は、何故かこの抹茶ドリンクをくれた。
っていうよりも、美佳ちゃんが毎回ホウさんに買ってくるのを私が飲んでいるっていう図式みたいで。

そりゃ、私は飲めるのは嬉しいけどさ。
でも、自分が貰ったものを人にあげるくらいなら、もういい加減ホウさんも断ったらいいのに、とも思った。
抹茶は嫌いだから違う飲み物にしてください、とかなんとかさ。

なぁんて、ホウさんの責任みたいなことを言っているけれど、実は自分だって共犯って意識は十分にある。
美佳ちゃんは、私がこれを飲んでいるなんて知らないんじゃないかと思うから。
だって、知っていたらこんなこと続けないだろうし。

それに、私だって断ればいいんだ、ホウさんに。
もういりません、って。
結構です、って。

ホウさんが鉄板にクレープのたねをさっとのせたあと、くるんとそれを広げて薄い生地を焼きだした。

「なに、見とれてんの」
ホウさんが言う。
わわわ、と思いながらレジに向かい「見とれてなんか」って嘘をつく。

本当は見とれていた。
上手だなぁって。
綺麗な手だなぁって。

「あ、そう」

ホウさんはそう言うと焼いた生地を使って、そこに薄くチョコレート塗ってぱらぱらとラムレーズンをちりばめた。
紙の包みにストンとそれが入れられた音がした。
クレープが包みの下まで落ちていく音。
スタンドに立てられたそれをお客さんに渡しながら、そういえば私はホウさんの作ったクレープを食べたことがないなぁと思った。

食べてみたい。

「ホウさ……」「あのさ」
言葉が重なる。
ホウさんが「ん？」って顔をしたので、「あ、お先にどうぞ」って言った。
ホウさんがお店の時計を見た。
「あ、俺、上がりの時間だ」
いつもよりも早い時間だなぁって思いながら、私も時計を見た。
「お疲れ様でした」
ホウさんに言う。
クレープは、また明日でいいやって思った。
「あ、お疲れさん」
丁度お客さんは誰もいない状態だった。
「あ、ホウさん、お疲れ様」
ホウさんの次のシフトの宮島さんって主婦さんが、ホウさんの肩をぽんとたたいた。

「ホウさんのあとは私に任せなさいって」
息子の幼稚園生活も順調に進みだしたから朝一のシフトでもＯＫなのよね、って宮島さんが言った。
「香夏子(かなこ)ちゃんも淋しくなるわね、ホウさんがいなくなると」
宮島さんはそう言いながら、店内にある洗面台で薬用石鹸を使い手を洗いだした。

「あ、辞めるんだ」
ホウさんだけに聞こえる声で、そう訊いた。
「うん。金がたまったから」

あぁ、そっか。お金がたまったら、辞めるんだ。
また、ふーんって思った。

「今までありがとうな」
ホウさんが言った。
「いえ。こちらこそ」
ぺこりと頭を下げた。

私は自分の言葉にも態度にも、全然気持ちがこもっていないって思った。

妙に空っぽになった気持ちを抱えながら帰宅すると、なんと父親がいた。
父親は私を見るなり、土下座をしてきた。
その上に弟が乗っかって遊んでいる。

「……香夏子、ごめんな」

この春、父親は家のお金をほとんど持って失踪したのだ。
私は小学生の弟と二人、なんとか食べるくらいのお金を稼ごうととりあえず高校を休んで弟が学校に行っている間に働けるアルバイトとしてクレープ屋で働いていたのだ。

「もう、お父さんは逃げないから」

その父親の本気の顔を見て、あぁもうこの生活は終ったんだって思った。
そう思えた瞬間、私の体中からは力が抜けてしまい、ふやけたわかめみたいになって、へなへなとその場に座り込んでしまった。

もう働かなくていい。
学校にも行ける。
……家に大人の人がいる。
そう考えたら、涙が出てきた。

そして、父親がいなくなったと知ってから今までのことが、次から次へと思いおこされた。
弟が泣き出したこととか、家中探してもお金が少ししかなかったこととか。
新聞購読を止めに販売店に行った時に、サービスにと貰った新聞の中に挟まれていたチラシでクレープ屋のアルバイトを見つけたこととか。
アルバイトを始めて最初の頃は、少しホウさんのことが恐かったこととか。

ホウさん。

お金がたまったからって、お店を辞めてしまったホウさん。

そのことを思うと、また少し涙が出てきた。

……正直に言うと、少しだけじゃないかも。
少しだけよりも、少しだけ多かったかも……。

私の世界に、父親は戻ってきた。
けれど、ホウさんはいなくなった。

後編

そのあとの我が家の動きは速かった。

私はその日の夕方に、家庭の事情を話してアルバイトを辞めさせてもらうことになった。

ついでに、父親が見つけた仕事場に近い場所に引越しをすることになった。

私は、弟の転校の手続きに追われた。

そして、明日引越しって時に、私は再びホウさんのことを思った。

自称マッサージ師なんて怪しい怪しいホウさんのことを。

自宅も知らないホウさんのことを。

ふらりとクレープ屋に遊びに行った。

最後に、お客さんとして向かったのだ。

宮島さんと美佳ちゃんは、そんな私をにこにこと迎えてくれた。

私は宮島さんが作ってくれたクレープを食べながら、ホウさんの味を探した。

そんな私を見て美佳ちゃんが、「香夏子ちゃんって、抹茶ドリンクが好きなんだよね」っていう爆弾発言をしてきた。

「え、え、え」と焦っていると、「私ね、ホウさんに頼まれたのよ。香夏子ちゃんが疲れた顔しているから、時々あの抹茶ドリンクを買って来てくれって。お金は自分が払うからって。以前ね、余分に買ってしまった抹茶ドリンクをホウさんにあげたときがあって。

それをホウさんは香夏子ちゃんにあげたんでしょ。ホウさん喜んでいたよ、抹茶ドリンクを飲んだ香夏子ちゃんが少し元気な顔になったって。ホウさんって仕事が癒し系なだけに人のことよく見ているんだね」

美佳ちゃんがそう言うと、宮島さんがふふふ、なんて笑った。

「あの、あのホウさんからの抹茶って。そうか、そうだったんだ」

あ、そうなんだ。

そっか、あの抹茶は、私のためにホウさんが奢ってくれていたんだ。

でも、ホウさんもお金をためていたのに、私に奢ってよかったのかなぁ。

お代は返したほうがいいのかなぁ……。

あ、でも、いいのかなぁ。

子どもは大人しく奢られていればいいのかなぁ。

ホウさんは、大人なわけだし。

そう。ホウさんは、大人である。

大人だった。

父親がいない間、私の一番身近な大人はホウさんで。

まぁだからって、別にホウさんが私に何かをしてくれたってことではないんだけれど。

だけど、ホウさんの毎日きっちりと働く姿を見ることで、私は心の中にあった不安定な部分が安定してくるのを感じていた。

怪しい肩書きのホウさんだけれど、ここでは真面目な労働者で。

それは、私が大人に――――父親に、求める姿だったのだ。

信頼と安定。

その姿に、私は救われていたんだと思った。

あ、でも、ホウさんだけじゃない。

宮島さんも、美佳ちゃんも、自分の仕事をきっちりこなしていた。

自分のことから逃げ出した父親に失望していた私は、こんな人たちに囲まれて、元気を取り戻していったんだと思った。

「あの。本当にありがとうございました」

どうしてもそう言いたくて、二人に向かって頭を下げた。

それは、ホウさんの時と違って心からのもので、感情をいっぱい込めてのものだった。

私は、ホウさんへの分まで頭を下げた。

そして、あの時あんな風に機械的にしか対応できなかった自分を恥じた。

心の中でホウさんに詫びた。

宮島さんと美佳ちゃんに、明日引っ越すことを伝えた。

薄々家庭の事情を知っていたような二人は、父親の帰宅に喜びながらも引っ越すことに驚いていた。

「元気でね」と宮島さんが言ってくれた。

「はい」

私の返事が合図になったかのように、お客さんが次から次へとやって来た。

私は再び頭を一回ぺこりと下げた後、クレープ屋をあとにした。

「就職、だよなぁ」

家族そろって心機一転の生活も順調進み、高校の最終学年に無事に駒を進めた私は、その後の進路について考えていた。

カバンには、進路についての最終希望を問うプリントが入っていた。

かさかさと揺れるプリントを意識しながら、私は夕飯の買いだしのためにスーパーへと向かった。

自立したい、と思った。

この町に来て、父親は本当に真面目になったのだけれど、親に置いて行かれたという記憶は私の中からなかなかぬぐえず、発作的にお財布の中のお金や家の通帳や印鑑を確認したりしてしまうのだ。

子どもの立場でいるのが嫌だった。

自分の手で、安定を手にしたかった。

つまりが、就職だ。

就職難と言われる昨今ではあるが、なんとか頑張って職を得たいと思った。

そんなことをあれこれ考えながらの買い物の帰り、ふとあるお店が目に入った。

「あれから一年ってことかぁ」
『昨年大好評！』なんてのぼりで、抹茶ドリンクの宣伝がしてあった。
「ちょっと、贅沢しちゃおう」
お店に入って注文して、かつてホウさんが渡してくれたプラスチックのカップを店員さんから受け取った。

家の近くの小高い公園のベンチに座る。
スーパーのビニール袋と抹茶のカップも側に置く。
ふぅと一呼吸したあと、私は足を前にぐっと伸ばして、ベンチからの眺めを堪能した。
ここからだとこの町が一望できるのだ。
小さな町だけれど、ここには私たちの安心と平和な生活があった。

父親が真面目に働くようになって、弟も明るくなった。
実は父親の再婚の話も出ている。
相手の人は父親よりも二つ年下の女性だ。
優しい手をしていた。
そしてその手は、働き者の手でもあった。

「私は、どうしようかなぁ」
四人で生活を始めるのか。
――――　それとも。
さてと、とプラスチックのカップに手を伸ばした。
すると、手を伸ばした先にはカップではなくて、人の手があった。

……見覚えのある。

ぱっと振り向くと、そこにはホウさんが立っていた。

「俺に一口ちょうだい」

白昼夢。

「……あ、あれ。あ、はい。どうぞ」

あれれ？　と思いつつ、ホウさんに抹茶ドリンクを勧める。

ホウさんは、サンキュと言ってドリンクを飲みだした。

私は、ホウさんとドリンクを結ぶストローを眺めていた。

白いストローが、緑色になる。

「すごく、甘いやん」

ホウさんが顔をしかめる。

「え？　そう？」

ホウさんが差し出したカップを受け取りそれを飲む。

「……ほんと。すごく甘い。なんで？」

去年はそんなに甘いとは、思わなかったのに。

「疲れていたんでしょ。いつも白い顔してレジに立っていたから」

「あ、そっか」

一年前の自分の様子を、改めて知った。

これを甘いと感じないくらい、私は疲れていたんだと。

「元気そうだね」

ホウさんが言う。

「あ、はい。元気です」

私も答える。

「三年生になった？」

ホウさんが聞く。

「はい」
「十八歳になった？」
「はい」
次から次へのホウさんからの単純な質問に、私は答えた。
「そっか。じゃ、お嫁においでよ」
「はい。……は？」

ホウさんを見る。
ホウさんが笑っている。

「俺もなんとか生活できるようになったので、お嫁さんが欲しいなぁ……なんて」
「あ、はぁ……」
ホウさんが私を？
「あの時、クレープ屋の時。俺、人生のどん底だったんだよね。人に裏切られてお金を取られて、独立資金足りなくなって」
ホウさんが小さく笑う。
「そんな時さ、あの店で、どう見ても高校生な君が真っ白な顔しながらも、生真面目にきっちりと働いててさ。そんな君との毎日を過ごすうちにさ、俺ももう一度がんばらないとなぁって思えてきて。だから、君がいなかったら、こんなに早くに立ち直れなかったって」

そう言うとホウさんは親指で自分の胸をたたいて、「心のここにさ」と言った。
「そう、ここにさ。なんていうか、いつまでも白い光のように君がいて」
そしてホウさんは、私の顔を覗き込んできた。
「で、宮島さんや美佳ちゃんに君の事を聞いて、遂にはここまで来てしまったというわけ」

来ちゃったんだよね、とホウさんが繰り返し言う。

「あ、そ、そうなんですか」

「そうなんですよ」

素っ気無い言葉しか返せないけれど、実は私の胸いっぱいにホウさんの言葉が広がっていて。

戸惑いもたくさんあるけれど、嬉しさもそれ以上あって。

でも、どうしたらいいのかわからないって気持ちもたくさんあって。

だって、ホウさんのこと。

働き者って以外には、あんまり知らないし。

たとえば、住所だって、誕生日だって。それに――――。

「あの、ホウさん」

「はい」

ホウさんが真面目な顔で、私を見る。

緊張する。

「あ、あの。ホウさんのフルネームって、なんていうんですか？」

私も負けずに真面目な顔でそう訊くと、「あ、俺達って、そこから始めないとダメだったか」ってホウさんが笑いだした。

そのホウさんの言葉が笑い声が、運動会のピストルのように私の心に響いた。

始まるんだと思った。

うん、始めようよ、ホウさん。

今まで見ていた町が急に輝いて見えだした。

ホウさんの笑顔に。

私の未来が見えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4016s/

抹茶

2011年7月15日22時27分発行